

梅川正美『昔話とアニメの中の政治学』（成文堂、2019）

関 根 勝

洗練された日本文化や芸術は簡素化のメカニズムを経て創造されます。日本のマンガやアニメがこれ程までに世界中の人々の心に訴えかけ、人の心を動かすのはなぜかと言えば、日本特有のこの簡素化によります。簡素化されたストーリー、プロット、登場人物は分りやすく、子供達にも十分理解できるし、外国の人々にも理解できる。この簡素化によって制作されたアニメやマンガの主人公に与えられている個人主義・勇気・友情が読者に共感を与えると梅川正美は指摘している。さらに梅川正美は正義が最後には勝つということでマンガの読者やアニメの視聴者は安堵するとこの著書の中で述べている。政治学から考える正義もマンガやアニメに見られる正義も本質的に相違はないと梅川正美が主張するが、正にその通りである。

この権威主義的な日本の政治学界に身を置いている政治学者であり、政治学教授の梅川正美がマンガやアニメに足を踏み入れるのには、並々ならぬ勇気が必要であったろう。研究対象をマンガやアニメにするということは大学の研究室を出て、巷の小学生や中学生が入り浸るマンガ本屋に立ち入ることであった。梅川正美はマンガが昔話の特質を現代に再現しており、そこに古来の政治学を見出して、とりつかれることになった。

民話や昔話の精神が現代のマンガやアニメに再生されていると梅川正美は繰り返し、『昔話とアニメの政治学』の中で述べている。梅川が指摘するように、確かに民話や昔話を通して1000年の昔から伝えられてきた日本人の精神がマンガやアニメという現代社会の表現形式の中に脈々と生き続けている。マンガ作家やアニメ作家が意識しているかどうか不明であるが、これ又1000年の昔から伝えられてきた mechanism of reduction（簡素化のメカニズム）がそこには働いている。精神や概念と手法においてもアニメやマンガは日本古来の伝統を受けついでいると言えよう。

関根勝が制作した『更級の月』に言及するによび、梅川正美は「昔話の伝統を、結果的に、復活させているとも言えます。」と述べているが関根がこの作品の中でしたとしたことは正に能の『姨捨』を現代の舞台に再生することであった。ここから脱線するが、私は能の師である観世流職分・浅見眞高師、当時87

才、から『姨捨』の稽古を受けた。シテの後の出、一声が「あら面白の折からやな」である。山に捨てられ亡霊となった老女が出て来て、月を見ながら月に照らされた山の風景を楽しむ。その風情を表現することが要求された。浅見眞高師はこのセリフを如何にも楽しげに謡う。しかし、私は山に捨てられた老女の亡霊ということを考えて、それ程楽しそうには謡えなかった。師匠からは「それじゃ、ちっとも面白くないよ。」と何編も直されたが、うまくは謡えなかった。数年後に私が上手に出来なかった『姨捨』を私なりに、その本質を変えずに別の形で表現してみようと思い、『姨捨』を『更級の月』に書き下して、簡素化の原理に基いた舞台を制作した。仏の世界を描く能とは異なり、私の作品では権力者が定めた理不尽な掟により、母と息子の情が断ち切れ、老母が死に追いやられるという条件設定にした。前半の部分では山に入り死に行くに譲らぬ意を決した老母と何んとか引き留めようとする息子の葛藤に焦点が当てられる。後半では翌日老母を迎えに来た息子が探しあぐね、嘆きと絶望の中に息子の老母に対する深い愛を表現した。ワキに相当する息子役のバリトン歌手・増原英也が最後に「月の道（作詞・関根勝 作曲・石川潤一）」を歌うことで浄土の世界を舞台に作り出した。そこに白づくめの老女の亡霊役のまごいづみを登場させ、「あら面白の折からやな」という『姨捨』のせりふを言わせた。老母の亡霊は月を愛で、息子の深い愛に支えられ、浄土の世界に入ったことを告げて、夜明けと共に山の奥に消えることにした。私がここで表現したかったことは究極の美であった。世阿弥によれば「冷えに冷えたる花」であり、死の世界の美しさであった。かなり脱線したが関根が長年にわたり追求してきたものは舞台上に美＝花を創造することである。美こそ正義であるとも考える。この点で『昔話とアニメの中の政治学』の著者・梅川正美が主張する正義が人の心を動かすということが簡素化された美として共通するのではあるまいか。

2019年11月13日